HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	意味の発生の場としての対人的相互作用：その予備的考察
Author(s)	佐藤，公治
Citation	北海道大學教育學部紀要，55，81-94
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29353
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_P81-94.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

意味の発生の場としての対人的相互作用

――その予備的考察――

佐 藤 公 治

Social Interactions as Contexts for Learning Cultural Meanings : A Preliminary Study

Kimiharu SATOH

1．は じ め に

小論は，人間の「心」やその発達に関する諸問題――その相当の部分は心理学が担ってきたという自負を心理学者自身は持っているが――を人間は自分とは異なる他人が存在し，その他人との間で一定の関係を結ぶ存在であるという観点から論じられるべきであるという立場から書かれたものである。このいわば「関係論的把握」という立場から，親と子，あるいは仲間どうしの関係をどのようなものとして扱い，またこの関係系の中から子どもは何を獲得し，自らを発達させているのかという問題を考えるのがここでの目的である。そして，ここでは対人的相互交渉の過程の中で子どもはさまざまなレベルと種類の「意味」を獲得していっているという点に特に注目をする。従って，小論はあくまでも対人的相互作用を「意味」の相互伝達という認知論的観点からながめたものであることと，これらに関連したいくつかの問題を素描した予備的なものであることを断わっておきたい。

対人的相互作用といっても実にさまざまなレベルのものがあり，またいくつかの観点からながめていくことが可能である。筆者が現在，具体的な研究対象としている対人的相互作用というのは教室における授業中の学習者間の対話と知識の共有化の過程であり，理解や知識獲得の活動にこの社会的相互作用がどう作用しているのかを明らかにしていこうというものである。そういう意味では親と子といったものの間に存在する相互作用とはその内容は異なっていると言わなければならない。しかし，「対話」についての本質や，その役割といったものを考えていく上での基本的枠組みには共通のものがあると考える。

2．母子相互作用はいかに研究されてきたか：その課題について

親子関係，中でも母子関係・母子相互作用の研究は発達研究の中では主要な問題の一つとして扱われ続けてきている。例えば，最近の「心理学評論」の特集として母子関係が取り上げられているが，その中で繁多（1988）は80年代に行なわれた母子関係の研究は4万件にも達しているという。

わが国における親子関係研究，別けても母子相互作用に関する研究に一つのインパクトを与えてきたのが三宅和夫先生の研究であることは異論のないところである。筆者は親子関係を専門にしてこなかったために，三宅プロジェクトの中でも母子相互作用については門外漢的に眺めてきたにすぎない。またプロジェクトに直接関わったものも「三大プロジェクト」（子どもの発達と

親子関係についての縦断的研究，親子関係と幼児の発達についての生態学的研究，乳児の気質・母子相互作用と愛着の形成）の中の後の２つからで，特に母子相互作用を考える上では重要な，いわゆる縦断的研究についてはその研究を内側から直接眺めるという機会を持たないできた。従って，三宅プロジェクトの中で常に中心的な位置を占めてきた母子相互作用研究がどのようなものであったのかということを直接述べる資格は筆者にはない。だが，母子相互作用を考えていく上で，あるいは母子関係研究として行なわれている他の多くの研究を批判的に検討する上でもこの縦断研はきわめて貴重な研究のケースになっているのである。

幸い，最近，三宅先生自身がこれまでの研究を振り返って述べたものに触れるという機会があり，そこから研究の現段階での先生自身の一つのまとめというものを我々は知ることができる。それは具体的には1990年３月５日から８日までの期間で行われた大学院の集中講義（教育学研究法Ⅰ）である。[1)]以下，そこで述べられたことの中で全体を通して特に筆者が重要な問題提起と感じた部分について取り上げ，その要点をまとめてみた。あくまでも筆者の個人的な関心に基づいた感想であり，問題の整理であることを断わっておく。従って，以下に書かれる内容についての責任はすべて筆者にある。

(1) 人間の発達を具体的な文脈の中で時間の流れと共にとらえよ

「子どもの発達の姿を縦断的に眺めてみると，そこには個性的かつダイナミックに変化をみせる，まさに時間と共に生きている子どもの姿がある。人間を独自性という個性を持った存在として，あるいは社会的・歴史的なものをベースにおいた人間理解が必要である。そして常にその人間が置かれている状況・コンテクストとの関係の中で発達の姿を見ていかなければならない。」

発達研究は個体発生レベルでの歴史・時間を扱う学問であり，時間の経過と共に成長・発達する姿を問題にする学問であることは誰もが否定しないところである。しかし，この時間と共に変化してくる発達というものをどういう空間・状況の中で捉えていくべきかという問題は必ずしも十分に検討されてきた訳ではない。時間と空間は共有し合っているものであると考えるならば，発達している子どもの空間，状況というものを重視し続けた先生の研究の姿勢は発達変化という時間変数を扱っている発達研究者に一つの警鐘を鳴らすものである。

時間を扱うということは同時に空間，状況＝文脈（context）を扱うということも意味する。それではこのコンテクストなるものを発達研究ではどう扱い，またどう研究の変数としていけばよいのだろうか。ここに実験室的研究対非実験室的な自然観察という２つの異なった研究のアプローチの対立がある。あるいは，コンテクスト情報を研究にどう生かして行くか，生態学的アプローチないしは自然観察から子どもの発達についての情報をどう得ていくべきかという問題がある。

(2) 心理学における法則定立の難しさ

「心理学で扱おうとしているのはまさにコンテクストを離れた一般的な人間であり，そのような人間理解ということが常識になってはいるが，個性を持った人間の集まりとして人間を眺めてみた時にはそういった対象についての一般法則の定立はきわめて限定したものにならざるを得ないのではないか。」

また，別のところで縦断的研究を振り返って次のような指摘をしている。「個々の子どもと母親に長い間にわたって接し資料を分析し検討していくなかから，従来の心理学の研究で，ある親

の行動・態度のタイプと子どもの発達との間に因果関係があるかのごとくに述べられていることが実はほとんどなにも明かにしていないにひとしいこと，『発達における直線的連続性』・『初期経験の連続性』・『人格特性の固定化』などの概念は複雑，微妙，かつ豊かな個人の心理的発達の問題の解明にとって不適切なものであることなどを学ぶことができたと思うのである。発達についての単純な公式化や範疇化を行なうなどということは全く非現実的なことであることは今日では常識となっていると考えるが，私はこの研究の経験を通して身をもって感じることができたのである。いずれまとめた報告書を作成したいと思っているが，それができたとしても事例報告やエピソード中心なものになるのではないかと考えている」(三宅，1986)。

これらの主張は，個性記述が心理学研究にはたす役割とは，心理学がめざす因果関係の解明とは，法則の定立とはどういうものか，またそもそも因果関係の解明ということが心理学で可能なのか（追求すべきなのか）といった根本的問題に触れることである。これらについては上の(1)の問題とも合わせて次の3，以下のところで改めて考えてみることにする。

(3) 親子関係をみるということは家族あるいは，社会のシステムそのものをみることでもある。

「母子関係，あるいは親子関係を研究するということは個人とその家庭，さらには社会の諸システムとの関係をみることでもある。母子関係は単に母と子だけの関係なのではなく，母と子を取り巻いている家庭，社会がそこに反映されているのであり，結局は個人と社会との関係を問題にすることに他ならない。であるから，子ども，母親を取り巻いている家庭や社会の状況を十分押さえた上で研究をしていかなければならない。だが現実には子どもや母親を中心としたまわりの環境をどれだけみて研究しているか疑問なのが多いのである。」

以上の指摘は，母子関係はあくまでも母と子という二人の閉じた系として扱ってはならないこと（その種の研究が現に多いことも事実である），そして母子関係を問題にするということは個人と社会を問題にすることである（そういうことを見るための切羽を提供しているということであろうか)という広いパースペクティブで見なければならないという提起であると解釈をしたい。

個人と社会の関わりが家庭という場の中で具体的に展開されていると考えることから始まるいくつかの研究上の課題，例えば母子の相互作用をどのような枠組みで考えていったらよいのかという点については以下の部分で触れていくことにする。

3．人間の行動をどう扱うか

(1) 消去唯物論とフォーク・サイコロジー

次のような振舞いをした人を見て，私達はそれをどのように解釈できるだろうか。

「郵便屋がある家の門戸を開けると，大きな怒ったようなシェパードの姿が目に入った。彼は急いで，戸を閉め，隣の家へ移動した」(Clark, 1987)。

私達は「郵便屋は犬を見て自分をかむに違いないと信じ (belief)，こわくなってかまれるのがいやで (desire) 戸を閉めて帰った」と普通は解釈する，あるいは解釈できるのである。いまの場合はあくまでも行動を見た後の解釈であったが，仮にもう1つの情報があったならば事前の行動の予測も可能になってくる。「この郵便屋は犬が好きではなく，いつも犬に吠えられると恐がっていた」。

私達がこのような郵便屋の行動を容易に解釈できるのはこの郵便屋が抱いている信念 belief といったものと同じものを予測・解釈する側の私達も持っており，それを当てはめて他人＝郵便屋

の信念や知識，願望を推測するからである。あるいはそのような推測できる能力を持っているからである。このような形で行動を予測・説明する仕方のことをフォーク・サイコロジー（folk psychology）[2]と呼んでいる。このフォーク・サイコロジーはもちろん心理学の一領域といった代物ではなく，いわゆる科学的心理学以前の素朴な，我々が人間に対して持っている常識的な知識やその体系のことを指しているのである。心理学の歴史はいわばいかにしてこのような非科学的な説明の状態から脱して科学的装いを身に付けようとしてきたかの歴史でもあったと言えよう。

このフォーク・サイコロジーは科学的心理学によって当然乗り越えられ，またこの科学的心理学もさらにより洗練された心に関する科学へと取って代えられていく，そういうシナリオを描いている人達がいる。「消去的唯物論（eliminative materialism）」と呼ばれる立場に立つ人達である（大沢，1990）。この立場の一人，Paul Churchland はその著「心の可塑性と実在論」(1979) の中で，信念や欲求といったものに基づいた常識上の心理学理論，彼はそれを「人間の人格理論，p（パーソン）ー理論」と呼んでいる，は今日の心理学で行なわれているところの数量的な関数関係で表現するという方法に取って代えられ，さらにこれも最終的には消去されて神経科学へと還元されていく運命にあるという。当然ながら今日あるような心理学は消滅する，ないしは名前は残ってもその内容は大きく変わったものになってくる訳である。

何故，そのようにして心理学は発展し，最後には皮肉にも消滅するという道を取らなければならないのか？それは心理学では「心」についての因果法則の解明を目指しているからに外ならない。しかもそこでは決定論的因果性の確立が目標になっているからである。心の科学的な解明のためには客観的な行動を手がかりとし，それを分析的になが め，数量化の手だてをとっていくが，最終的にはこの行動の振舞いを因果的に説明するためには脳の神経活動に行き着いてしまわざるを得ないからである。

それでははたしてフォーク・サイコロジーは科学的心理学の確立のためには足かせになっているのか？消滅されるべき厄介物なのか？　否である。

だが，ここではこれ以上結論を述べるのを止めて次の節で心理学がこのような方向をとらざるを得なかった因果法則の解明という考え方についてもう少し触れてみよう。

(2) 心理学における因果法則とは

野家伸也（1989）は「物理主義と心理学的説明の本性」と題した短い論文の中で，心理学の多くがこれまで取ってきた方法というのは基本的には古典物理学のそれを援用したものであったこと，そしてそこから帰結されるところの決定論的因果性の解明ということが研究の目標となってきたことを指摘する。古典物理学では物質世界を連続量の世界としてとらえ，その変化を実数あるいは複素数を扱う解析学を用いて記述し，原理的にはすべての自然現象を因果法則的に説明可能な決定論的な体系というものを作ってきたが，心理学ではこのアプローチをそのまま心の解明に適用してきたということである。さらに野家はこの古典物理学的法則化の心理学への持込み方の一つとして取られたのが心という内的過程を行動という外在的なものに置き換えるという広い意味での行動主義の立場であるという。たしかに今日我々が取っている方法も基本的にはこの路線の上にあるといってよい。同じ物理主義に立つもう一つの別のアプローチの仕方は心を行動と同じ外在的なものである大脳過程に置き換えて考えようというもので，心をいわば「物理言語」で置き換えて考えようとする点では基本的には２つは同じことであると野家はいう。

要するに何が悪いのかといえば，決定論的な因果性があてはまらないようなものに無理にそれをあてはめた点にあるのである。つまり，決定論的因果性があてはまるのは連続量の世界であって，心理学の世界はこのことがすべてあてはまりはしないのである（このような還元主義を越えようとしたところに認知科学の方法があるのは承知のことである）。

もちろん，野家が言うような心理学の世界では決定論的因果性があてはまるのは全く無いとはいえず，その点ではこの主張はやや極論の感がある。しかし，我々が心についての因果関係を解明しようという時，その研究対象がはたして因果のシステムとして成り立ち得るものであるかどうか，その考慮をどこまでやっていただろうか。自己の反省を含めて我々はあまりに無頓着ではなかったのか。フォン・ウリクト（von Wright, G. H.）は「説明と理解」(1971) の中である事象の間に因果関係が成り立つためにはそれらが閉じたシステムであり，またそれらが操作可能であることが必要であると述べている。閉じたシステムであるということはそのシステムの外に原因を求めることはできないことを意味しているのであり，操作可能であるということは原因であるpの方を変えることによって，結果qが確かに変わったということが得られるということである。実に当然のことを言っているだけなのだが，はたしてこの2つの条件が満たされている心理学的事象がどれだけあるだろうか。まさに本論で問題にしようとしている母子相互作用は母と子を全く閉じたシステムとは考えることはできないのであり，そもそもこの間に因果関係を見い出そうとすることは極めて限定されてこざるを得ないのである。特に子どもの発達の程度とその内容に親の働きかけがどう作用しているかといった形で親子関係を論ずる時，私達がともすると忘れがちなのは子ども自体が社会に開かれたシステムであるということである。ある時点の親と子の相互作用の過程そのものを論じるのであればともかく，親の働きかけが時間的に相当隔った子どもの知的，社会的あるいはパーソナリティ特性の発達を規定しているということを述べることにはかなりの無理があるのである。子どもは実にさまざまな外的諸変数とインターラクトし続けているのであるから。この種の問題を考える時，cross–lagged panel correlationといった方法で因果の方向を探るという試みもあるが，むしろ発達についての豊富な観察が得られる現象記述の方がそこから人間の発達について得られる知見ははるかに多いと考える。かく言う筆者もかつて母子関係との比較で父子関係を論じた時に結論として父と母とでは子どもに及ぼす影響が違うといったことを述べたことがあるが（Sato, et al. 1979）このような解釈は避けねばならないということであろう。

それでは心理学が古典的物理主義に基づく因果法則の定立を捨てた時，何が残るのであろうか？ Dennett, D. C. は「Brainstorms」(1978) の中で心理学固有の行動の予測・説明の仕方として存在し得るものは「志向的態度（intentional stance）」による説明であるという。これはまさに上で見たフォーク・サイコロジーで取られている説明態度そのものなのである。行動というのは信念や願望といったその人が持っている「志向性」の表れなのであり，予測をする側の人間が同じく持っている「志向性」に基づいて説明しようというものである。

私達は心の解明のために観察・計量化可能な行動を分析の対象として当然のことのように用い続けてきた。もちろん，その行動を単なる行動としてのみ見るのではなく，その行動からその背後にある心的活動を推測・解釈するという方略も取ってきた。そうでなければ科学的心理学にはならないのだから（と，ずっと信じてきた）。赤ん坊が珍しい絵を見せられ，始めはじっとよく見ていたが同じものを何度も見ている中に見る時間が短かくなったという行動を観察した時，注視時間そのものの数字は何ら心理学的実体を持つものではなく，この結果から子どもは見飽きた

という心的状態を推測した時始めて心理学的意味が出てくるのである。そこでは私達大人も同じ様な「志向性」，飽きたら目を離すという事が解釈を可能にしているのである。どんな厳密な行動分析をしても信念，欲求といった「志向性」に頼った行動の解釈は心理学の中には残らざるを得ないのである。これなしには心理学的説明は不可能と言っても過言ではない。しばしば発達研究で用いられる「行動評定」は厳密な行動分析と比べてあまりにも大雑把で，客観性に欠ける，科学的心理学の方法にはなりにくいと批判されたりするが，どんなに秒単位の細かい行動を科学的と称して分析したとしても最後はそこにある心的活動の解釈の段階では「志向性」に頼らざるを得ないのである。行動評定のような比較的直接「志向性」に基づいた判断をするか，何段かのデータ・リダクションの過程が間に入っているかの違いでしかないのである。

「志向性」に基づく行動解釈で大事なことはそれができるのは私達が「他人の行動の振舞いを一定の活動の脈絡の中に一定の位置をもつ行為として把握できるからである」（山田友幸，1985）が，同時に行動の解釈はその行動の意味が正しく把握できるような行動の文脈の流れの中で捉えられなければならないことを意味している。しばしば行動の解釈不能や誤った解釈を犯すのは多くの場合，「志向性」解釈を支えている文脈とは異質のところで起きている行動を拾っていることによるのである。次に我々はどのような位置で人間を観察をすべきかという問題を考えてみる。

(3) G. H. ミードの社会的行動主義と観察者の位置

本論で問題にしてきている母子相互作用研究で扱われる相互行為という行動をどのような観点でながめるべきかということに関して一つの枠組みを提供してくれるのがG. H. ミードの社会的行動主義の考えである。社会的行動主義はミードの「精神・自我・社会」の冒頭第1部で述べられているものであるが，以下，船津（1976），安川（1986），岩城（1987）なども参考にしながらミードの行動の扱い方を概観してみよう。

社会的行動主義はミードが「精神・自我・社会」の中で何度となく批判しているワトソンの行動主義に対する対抗概念として提出されたものである。図1に見るようにワトソンの行動主義で

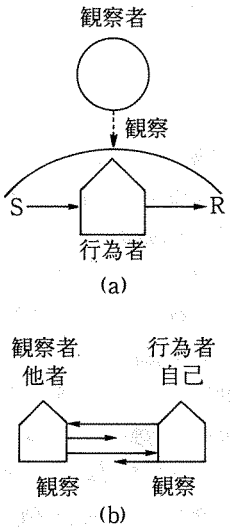


図1 行為者と観察者の関係

（岩城，1987 より）

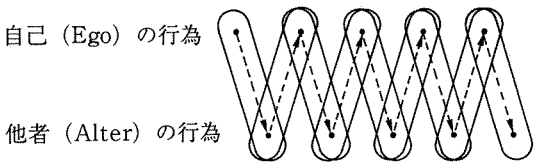
は行為者の刺激と反応の連鎖という客観的な観察が可能な行動を観察者（研究者）は外からまさに客観的に眺めるという方法が想定されている。あくまでも観察者は対象となっている行為者の行動を一方的に観察の客体として眺める。決して行為者と同じ世界にはいない。外の世界から眺めるだけである。ここが重要な点であることはこの後触れる。そしてその行動は心的なものの指標足り得ているという大前提に基づいて作業は進められる訳である。これに対して，ミードが扱う行動というのは図の（b）のようにあくまでも観察者と行為者とは行為を共有し合う世界の中におり，いわば同じ相互行為のプロセスを共有しうる他者どうしという関係にある。観察者と行為者とが互いに働きかけ合うという中で，観察者はあくまでも自己の中に有している他者についての経験という枠組みを通して行為者の行動を解釈していくのである。人間の行動の意味を捉えるということはその人間が行動している状況，つまりは生きている状況の中から，しかも外から見るのではなくこの状況を共有し合う＝相互行為する中から得られるものであると言えよう。ワトソンの行動主義ではあくまでも人間の行動を自然物とおなじようなものとみなして客観的な行動のみを扱った。その後の心理学でも，そして現在の心理学でもあくまでも対象になるのは行動で，それを外側から客観的に眺め，それを心的な内容の指標として使い，最終的に内的なもの＝心を推定していく。行動についての観察の仕方，観察者の位置はワトソンのそれと基本的には変わっていないといえる。ミードのこの社会的行動主義の主張は単なるワトソンの行動主義批判としてだけではなく，さらに他者の行為の自己の中での内面化に代表される「ミードの行為・意味論へと展開されているものなのであり」,「彼の人間の状況への動かし難い認識・仮定なのである」（岩城1987)。これらはミードのシンボリック・インタラクショニズムの考え方の根底にあるものなのである。

我々にとって行動の客観性とはどういうことなのであろうか。人間という他人の存在している中で様々な相互作用を展開している人間の行動，しかもその相互作用を通して発達を実現させていく対象を扱っている発達研究でははたしてその行動の意味を生きている状況を抜きに捉えることはできるだろうか。このミードの社会的行動主義の考えでも前に述べフォーク・サイコロジーや「志向的態度」に基づく人間把握の仕方と同じことが指摘されているのである。

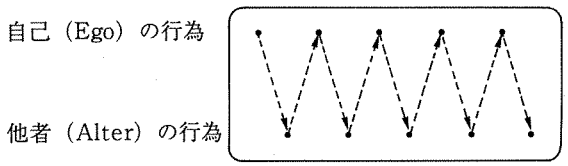
4．母子相互作用とそこで共有されるものは何か

(1) 相互作用のタイプ

正村（1986）はG. H. ミードの自我理論の発展の方向として自我をシステム論な観点から検討するという作業の中で，自己と他者との関係を関係論的に捉えることの重要性を強調している。図2は自己と他者の関係についての接近法のいくつかを類型化したものであるが，自己と他者は子と母に置き換えてみても構わない。図2の（a）は自己と他者の関係を要素的なものに還元してしまう立場で，両者は関係し合うといってもあくまでも相互に独立な形で存在している行為間の連関として捉えられている。これまでの母子関係の捉え方としてこの立場が圧倒的であったといえるだろう。そして母のあるいは子の行動が他者にどう作用しているかといった議論へと展開していくことになる。これに対して（b）で表わされている関係論的アプローチでは自己と他者の行為連関だけにとどまらず，これらの自他行為関係が意味的なものとして主体の中に行為連関図式として成立していく過程が位置づけられている。自己と他者との行為連関が自分自身の中に意味的・象徴的な形で再現されるようになり，これがまた自己の行為を反応として引き出す刺激にもなっていくのである。まさにミードが想定した「自我」がそれであり，自我を真正面から取



(a) **要素還元論的アプローチ**



(b) **関係論的アプローチ**

図2 自己と他者の関係把握の2つのタイプ

（正村，1986より一部改変）

り上げ，それをシステム論的な形で展開したルーマンが取っている考え方がこれである。ここではルーマンの考えを述べる余裕はないが，とにかく心理学では相互作用という自他関係の形成の問題として扱うことはほとんどなかったといってよい。このような関係論的に相互作用をみるということは少なくとも相互作用を別の視点から眺めることを要請するものである。いったい相互作用を通して子どもの内面に何が形成されていくのか，これが問題なのである。そしてこの時大事なのはヴァレラとマトウラーナが「自己創出性 autopoiesis」（Maturana & Varela，1984）の言葉で言っているような意味の選択・生成を自我が自立的に行なっているということである（大澤，1988；1990）。

(2) 意味の伝達としての相互作用過程

相互作用の過程が意味の伝達であるということをここでは発達初期における親子関係を捉えていく上で重要な記述枠組みとなっている「愛着」attachment を例にして考えてみよう。つまり，愛着の問題は，親と子との愛着が成立する結果として子どもの中に作られる対人関係を軸とした「世界（当面は家庭を中心にした小さな世界空間）に関する社会的意味とその理解の形成」という観点から捉えることが可能ではないかということである。だから愛着の成立は子どもの側から言えば，後の発達の時期で展開される親以外の人とのより広い対人関係の在り様にも影響を与えるであろうところの，対人関係に関する認識枠の成立ということにもなる。

愛着は親と子の対人的関係の過程で作られた一種の「機能的なもの」であり，「様態」でもある。このようなプロセスとしての親子関係を相互作用という視点からながめることの重要性とその一定の研究成果については詳しく述べる必要のない程自明のことである。

だから，愛着の成立およびその愛着の質的違い（タイプ）の起源を発達初期からの母子相互作用の過程に求めようとすることは当然のことである。あるいは母子双方の行為連関という考えから，相互作用の一方の側の子どもの個人差変数である「気質的特徴」あるいは行動傾向といったものが愛着のタイプを決定しているという仮説が想定されるのも当然のことである。

それでは母子の間で成立した愛着というものは実際は何なのであろうか。母と子の間の安定した情緒的結びつきの成立ということなのかもしれないが，この愛着の成立を子どもの側からながめてみるとどういうことがいえるだろうか。いわば母子の愛着関係を通して子どもの中に作られる対人関係を含めた様々な社会的意味（行動の随伴性の知覚から，大人との positive な感情の交流のためのコミュニケーション手段の獲得，自他関係と自我の成立，親の行動の模倣，social referencing としての親の行動の利用等々）と，これらを含めた社会的ネットワークに関する知識の獲得について注目していくことが必要ではないか。というのは，関係系のもう一方の当事者である子どもが社会的文脈の中で母と子の関係をどのように理解・解釈しているかということは子どもがとるべき行動を大きく決定する要素になっているからである。これまでの愛着研究では，少なくとも Bowlby のものは別にしても，Ainsworth 流の Attachment のタイプ論の研究の流れの中ではこれらの点が必ずしも研究の焦点にはなってこなかったといえよう。

(3) 「相互作用」の研究で何をしなければならないか：残された問題は何か

上では「愛着」を例にして母子の相互作用を子どもの側からながめるとどういう課題が導かれてくるかということを述べた。そもそもこれまでの発達心理学における「相互作用」のアプローチでは次のような諸点の把握が必ずしも十分には行なわれてこなかったと考える。以下，それらについて述べてみる。

① 関係系を意味の伝達機構として捉えること

これまでの研究では，親子関係の関係系を独立変数としての親の行動そのものや親と子の会話パターンと，その従属変数としての子どもの知的発達，社会化の発達等という形で扱ってきた。いわば構成要素に分解する還元主義的な対象把握の方法がとられることが多かったのである。例えば，親の言語的応答性の良さは子どもの知能水準と高い相関を示していることから従属変数である子どもの知能の発達を規定している要因に独立変数である親の働きかけ方があると説明する仕方がある。ここでは，実は相互作用と相互作用の結果としての子どもの知的能力の水準という時間的にも離れたものを相関関係として捉えたにすぎないのである。この問題は小論において既に触れたことである。相互作用の中で子どもの中に何が獲得されたのかという話が欠落しているのである。多少ともこのような接近を試みたものとして，Hayes-Roth ら（1981）のものがある（図3）。そこでは子どもが親や教師とインターラクトしながら課題を解いていく過程において子どもが始めは大人からの援助を受けながら解いていたのが（図3の他者－指導サイクル），次第に課題を解くための知識・方略といったものを自発的に発見・獲得していくようになる様子（図3，自己－指導サイクル）がモデル化されている。相互作用を通して子どもが具体的に何を獲得しているかという問題に一歩踏み込んだ研究といえようが，しかしここでは一般的な問題解決の方略として知識が抽象化された形でしか扱われていないところに問題がある。

以上のように議論しだすといったい子どもは広い意味での環境から何を獲得していくのかを明らかにしなければならなくなるのである。親子の関係系に関しては親は毎日の生活の中でのコミュニケーションを通して，ポジティブな情緒的感情の交感，随伴的反応の発信，具体的なしつ

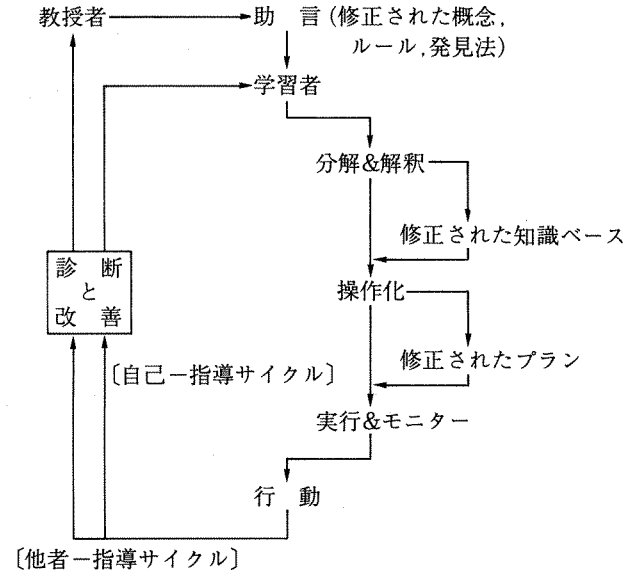


図3 自己学習化のサイクル

(Hayes-Roth, et al., 1981より)

けのためのコントロール情報，社会的な規範に則った社会的なルール（例えば，「バイバイ」，「イタダキマス」，「オヤスミ」の挨拶とその機能的意味に始まり，食事のルール，断乳の開始というクリティカルな事態についての理解，トイレット・トレーニングにいたるまでのもの），記号としての言葉の意味とその機能，等々にさまざまな情報を与えている。当然のことながら，子どももそれらの記号としての意味を獲得していくのであり，相互作用の過程で何が子どもに意味として伝達されているのかという問題の立て方をしてみることが必要なのである。

ともかく親の行動，子どもの知的能力といったようにそれぞれを実体的に扱ってしまうこと，相関関係として論じることから親と子の関係，その様態，様相を把握することへと視点を移してみたいのである。

上で述べたことを一言で要約するならば，関係論的把握であり，親と子の間の相互作用を記号過程としてみるということになろう。

② 親子関係をより豊富な文脈情報の下でみること

親と子の行動の意味の相互交換といういわば記号論的な説明が行われるためにはまずもってそれらの行動の意味と相互の意味把握の内容をおさえておかなければならない。記号が持っている意味はそれが使われる文脈を抜きにしては決定できないことは記号論やコミュニケーション研究においてはもはや疑問を差しはさむ余地のないことである。行動の文脈をつねに共有している親のみが子どもの意味把握の実態を知り得る唯一の人間であることが多い。この親の理解状態と近似の状態にどう近づくか，あるいは親＝研究者の立場を積極的に取り入れる（山田洋子，1987）か，といった方法論の問題がある。筆者は後者のような研究をもっと取り入れるべきである，あるいは少なくともそのようなチャンスを研究者はもっと利用すべきであると考える。ここではまったく触れることは出来なかったが，筆者は現在4年間にわたる長男Gの観察と記録を集積している。本論で述べたことの多くはこれらの観察結果に基づいたものであり，必要によっては

ここで主張したことを具体的な事実で示すことも可能である。

③　長い時間タームの中で行動の発生を考える

愛着は操作的にはAinsworthのStrange Situation Paradigmという実験室場面における母子の行動によって説明されるが，当然のことながら1歳でみられたこの愛着関係はその1歳代を通した母子の関係行動の積み重ねによって作られたものである。Bower（1977）の言う愛着のコミュニケーション理論は愛着の起源を母子の関係行動の中で子どもによって獲得される行動の随伴性の知覚に求めたものである。親やまわりの大人との間で交わされる相互交渉の中で行動の随伴性を発見し，特定の人間（多くは母及び父）との意味伝達＝コミュニケーション可能性を確信していく。さらに言うと，この行動の随伴性の知覚が強力に作られていく場面は自分の意志がはっきりと相手に伝わることが自己の生存のためにも危急なdistress-reliefの場面である。この随伴性の知覚が対人関係と前言語的コミュニケーションの発達の基礎として機制しているとBowerは考えるのであるが，その具体的な表現型としてあるのが愛着関係であるとみることができる。

その他，指さし行動，social referencing等の発達初期で発現するいくつかの重要な行動の起源も親とのコミュニケーションの経過の中で発生するものであり，その機能的意味も親との意志疎通という観点で確定できるのである。このような一連の親と子の間の長いコミュニケーションの過程とその成立の中で「愛着」というものが位置づけられるべきである。

5．まとめ：親との相互作用の過程の中で子どもは何を獲得していくか

これまで見てきたように，子どもは親とのさまざまなレベルのコミュニケーション可能性を実感として体得してくるが，このコミュニケーションのプロセスの中で子どもはまた親から出される行動についての意味付与を受け取っていくことになる。上で述べてきた乳児の随伴性の知覚も，しばしば行動のシンクロニーにみられるように随伴性の知覚は生得的であることを主張する考えもある。しかし，これも子どもの行動に対して大人が情緒的な同調反応をすることによって子どもの行動にはある一定の意味を帯びたものであるということを子どもに知らせる，意味付与を与えた結果として生じたものであると考えることができるわけである。つまり，親の方が子どもの活動を「意味のある活動」として構成する機能を果たしていると考える。意味のない赤ん坊の行動にも我々は「意味」を与え，「解釈」し，子どもの行動に応答的に反応しようとする。村田（1985）が述べているように子どもが大人の行動を模倣でき，他者（＝大人）の「態度」を取ることができるようになるのも大人の方が子どもを「模倣」し，「子どもの態度を取る」，つまり，大人が幼児語をあえて使うという行動に象徴されているような大人が子どものレベルに合わせる形で相互行為を発生させているということが背景に存在しているのである。

このように親は意味をもっていない乳児の行動に意味を与え，乳児自身にも自分の行動には意味伝達の機能があることを知らせ，コミュニケーションのサインへと変換させていく。いわば意味の世界へ誘いこんでいくのである。そうしなければ我々の社会への順応はないからである。

D'Andrade（1984）は文化としての意味体系（cultural meaning systems）が持っている機能の一部には物の考え方や行動の振舞い方を規定する働きや，ある一定の行動をとらせるように動機づける機能といったものをあることを指摘している。このような文化が持っている知識＝意味空間を他人（発達初期の子どもであれば多くは親ということになる）との相互作用を通して獲得しているのであり，親は子どもの前では一種の社会・文化の意味付与者として振舞うことになるのである。

同じように愛着の場合にも母子間で作られた情緒的・行動的交信ルールについての相互の協約＝社会的行動の意味の確定が行われ，それに基づいて子どもは母親へ情緒的要求を出し，また期待を持つ。その意味ではStrange Situationという特殊な場面における親の行動について子どもが持っている記号的意味を反映したものであり，そもそも愛着は母子（父子）間の行動の意味＝記号についての取り決めの内容ともいえるのかもしれない。それを子どもの側から捉えてみるとBowlbyの言うinternal working modelsということになるのではないか。従って，アタッチメントの内容というのは生後の一年間にわたる行動を相互に了解することができる共通の意味世界の確定作業の結果を反映したものと考えるべきである。ところがAinsworthのStrange Situation (ASS)の場面ではある限られた時間の，限定された実験室場面における母子の行動によって愛着の内容を決定してしまっている。そこでは実験室における母子の行動パターンとアタッチメントの内容とは対応関係を持っているという予見から出発している（たしかにAinsworthはASSの確定の前に家庭における自然観察の結果を基にしたのではあるが)。

生後一年間において子どもが獲得すべき重要なものの一つに母親との愛着関係があることはまったく疑いのないことであろう。しかし，この愛着をも規定している親と子どもの間で成立させている意味世界をこそ明らかにすべき対象であると考える。母子の愛着関係も子どもが作り上げる社会・文化についての記号認識の一部なのであり，母子の愛着関係を継起としてより広い社会的世界についての記号的意味を確定（＝社会規範のルールの獲得）していかなければならないからである。

このように愛着を含めて親（母および父）と子の意味のやり取り＝コミュニケーションという観点でながめてみると，愛着とも関連するいくつかの子どもが獲得すべきものが同定されてくる。行動の随伴性，意図的・志向性の獲得，referencing（社会的ルールの発信源，行動の是非の判断のための情報提供者としての親を位置づける)，指さし（自己の意思の伝達手段と関心の共有＝コミュニケーションのためのもの)，物のやり取り，行動の模倣といったことなどである。これらはいわば発達初期において子どもが獲得すべき発達の指標（milestone）として位置づけられるのではないか。そしてこれらが「生活世界」のなかではたしている役割の吟味をも加えて，よりトータルな子どもの持つ社会・文化について（当然，母子関係も含まれる）の記号的認識の世界を私達は明らかにしていかなければならない。

これまでの親子関係の研究では，理論的分析，「メタ」の部分が必ずしも十分だったとはいえない。「関係」をどう考えるのか，母子のコミュニケーションとは，情緒的結びつきは何か，等々「メタ」の部分に関しては不明のことばかりである。

親子関係の心理学的研究を中軸にすえながらも，哲学，社会学その他を含めた学際的なアプローチが必要になるのではないか。親子関係は個人と社会との関係を考えるうえでの格好の切り羽を提供しているのだから。

註

1）この講義はあくまでも大学院の集中講義として行なわれたものであり，当然ながら受講は大学院生に限定されたものであった。しかし，先生の好意によりビデオによる記録が可能になった。必ずしも広く公開されることを意図して話されたものでも，また事前に活字の形で出されたものでないことを考慮するならば，先生の事前の検閲を経て完璧を期すべきであったと考える。しかし今回は講義を聞いた筆者の感想，

ないしは問題の整理ということでそれを行なっていない。当初は講義の主要な内容についての完全なる文章化と掲載を意図していたが，今回は行なうことができなかった。それについては他日を期したい。

2）folk psychology は民間心理学と訳されたり，民族心理学，通俗心理学，俗流心理学といった訳語が当てられたりしている。定訳がない時の常套手段として，また訳語による誤解が生じるのを避ける意味でもここではそのままフォーク・サイコロジーとした。

フォーク・サイコロジーをめぐる議論については土屋（1986），山田友幸（1985，1987），大沢（1988，1990），信原（1990）らが参考になる。

文　　献

Bower, T. G. R. 1977 *A Primer of infant development.* W. H. Freeman and Company.（岡本他訳　1980　乳児期 —— 可能性を生きる ——　ミネルヴァ書房）

Churchland, P. M. 1979 *Scientific realism and the plasticity of mind.* Cambridge University Press.（村上陽一郎他訳　1986　心の可塑性と実在論　紀伊國屋書店）

Clark, A. 1987 From folk psychology to naive psychology. *Cognitive Science,* 11, 139–154.

D'Andrade, R. G. 1974 Cultural meaning systems. In R. Shweder & R. Levine (Eds.) *Cultural theory.* London : Cambridge University Press.

Dennett, D. C. 1978 *Brainstorms.* MIT Press.

船津　衛　1976　シンボリック相互作用論　恒星社厚生閣.

Hayes-Roth. F., Klahr, P. & Mostow, D. J. 1981 Advice taking and knowledge refinement ; An interative view of skill acquisition. In J. R. Anderson (ed.) *Cognitive skills and their acquisiton,* LEA.

繁多　進　1988　母子関係研究の展望　心理学評論，31巻1号，4－19.

岩城千早　1987　G. H. ミードの「社会的行動主義」 —— 相互行為プロセスへのパースペクティブ —— 社会学評論，38巻3号，306－320.

正村俊之　1986　パーソナリティー・システムの生成としての自我形成　思想（岩波書店）1986年9月号，64－89.

Maturana, H. & Varela, F 1984 *El Arbol del Conocimiento.* Editoral Universitaria.（管啓次郎訳　1987　知恵の樹　朝日出版社）

Mead, G. H. 1934 Mind, Self and Society. The University of Chicago Press.（稲葉他訳　1973　精神・自我・社会　青木書店）

三宅和夫　1986　発達研究に関するノート —— 城戸先生との出会いとかかわらせて ——　北海道大学教育学部紀要，48号，1－15.

村田純一　1985　人称の成立 —— 子供における相互主観性の成立 ——　新・岩波講座第4巻「世界と意味」　67－95.

信原幸弘　1990　フォーク・サイコロジーの運命　現代思想，18巻7号，59－69.

野家伸也　1989　物理主義と心理学的説明の本性　現代思想，17巻7号，256－259.

大沢秀介　1988　AI・素朴心理学・合理性　理想，第640号，65－77.

大沢秀介　1990　素朴心理学は還元されうるか　現代思想，18巻7号，70－80.

大澤真幸　1988　意味と他者性　現代思想，16巻1号　78－91.

大澤真幸　1990　意味の社会的次元 —— 意味の理論はいかなる必然性のもとで社会の理論でもあるのか？ ——　理論と方法（数理社会学会），7，23－42.

Sato, K. & Miyake, K. 1979 What aspects of parental behavior lead to the child's positive cognitive development during years prior to and soon after school entrance ? *Annual Report 1978–1979*, Research & Clinical Center for Child Development, Faculty of Education, Hokkaido University, 2, 15–30.

土屋 俊 1986 心の科学は可能か 認知科学選書7，東京大学出版会.

von Wright, G. H. 1971 *Explanation and understanding.* Cornell University Press. (丸山高司他訳 1984 説明と理解 産業図書)

山田友幸 1985 志向性と生活形式 哲学雑誌（有斐閣)，第100巻，第772号，144－161.

山田友幸 1987 心をもつ機械のための民間心理学 科学哲学，20，47－60.

山田洋子 1987 ことばの前のことば —— ことばが生まれるすじみち I —— 新曜社

安川 一 1986 「社会行動主義」と G. H. ミード・I ——G. H. ミード「行為の哲学」に向けて —— 一橋研究，第11巻2号，105－131.